

《研究ノート》

フランツ・キュモン伝に向けて

— 研究動向と年譜 —

井上文則

はじめに

フランツ・キュモン (Franz Valéry Marie Cumont) の名は、何よりもミトラス教の研究と結びついて高名である。わが国でも小川英雄氏によってその著作『ミトラの密儀』の邦訳がなされており¹⁾、やはりミトラス教との関係でその名を知られた方が多いのではないだろうか。しかし、キュモンの業績は、ミトラス教研究だけに止まるものではない。同じく小川英雄氏によるキュモンのもう一つの邦訳『古代ローマの来世観』からも窺われるように²⁾、キュモンは広く古代宗教史の研究者でもあった。キュモンはまた同時にユーフラテス川に臨む城塞都市ドゥラ・エウロポスを発掘した考古学者でもあり、ユリアヌス帝の書簡集を校訂した文献学者でもあり、さらには多くの金石文を発見、報告した碑文学者でもあった。

このような様々な領域にわたる数多くの業績を残した³⁾ キュモンはベルギーの人で、1868年の生まれである。ガン大学を卒業後、ドイツ、オーストリア、フランスへ留学し、帰国後、24歳でガン大学の教授になった。しかし、1911年、43歳の時、大学教育へ介入した時の文部大臣と対立、ガン大学を辞職することになり、以後は、市井の学者としてパリとローマに居を構え、生涯を送った。終生独身を通し、1947年に79歳で没している。

筆者は、かねてよりこのフランツ・キュモンの評伝を著すことを計画していたが⁴⁾、本稿ではその準備段階の作業として、キュモン研究の動向を整理紹介し、年譜の作成を行ってみたい。

1. フランツ・キュモン研究の動向

(1) 没後から1996年まで

キュモンは、生前から学者として令名高かったため、死後、様々な場にその追悼文が掲載された。代表的なものとしては、F. De Ruyt, W. Lameere, C. Préaux, R. Dussand, L. Canetらによるものを挙げることができる⁵⁾。そして、これらがいわばキュモンの最初の簡略な評伝ということになる。さらに後には、キュモンの名は事典に載るようになったため、その

項目も短いながらも評伝と呼ぶことができるが⁶⁾、1997年まで欧米でキュモンの生涯が注目されてきたとは言い難い状況にあった。この間に公表された研究として言及しておく必要があるのは、キュモンとモムゼンの往復書簡を分析した F. Vercauteren の研究⁷⁾とローマ宗教史研究におけるキュモンの位置について論じた A. Momigliano の論考⁸⁾ぐらいであろう。一方、わが国では、小川英雄氏と前田耕作氏が追悼文や事典から得られた情報を利用しつつ、キュモンの著作を読み込むことで、独自のキュモン論を展開したことは注目に値する⁹⁾。しかし、情報量の限界は否めず、さらなるキュモン研究の進展には、新たなきっかけが必要であった。

(2) 1997年：「キュモン年」の到来

それは1997年に訪れた。この年はキュモン没後50年に当たり、キュモンの書簡の刊行やキュモンをめぐる2つのシンポジウムが行われたのである。

書簡の刊行についてまず述べれば、在ローマのアカデミア・ベルギカ (Academia Belgica) では初代総裁 (Président du Conseil d'Administration) であったキュモンの業績を称えて、キュモンによって遺贈された書簡の刊行を行うべく¹⁰⁾、1993年からその整理が進められてきていたが、その成果が C. Bonnet によって 569 頁に及ぶ大著 *La correspondance scientifique de Franz Cumont conservée à l'Academia Belgica de Rome* Bruxelles, Rome, 1997 として結実したのである。

Bonnet の書物は、キュモンの評伝を前置きに、キュモンの学術的書簡 (lettres scientifiques) を整理、刊行したものである。アカデミア・ベルギカに遺贈されたキュモンの書簡の数は、1908 点に上り、キュモンが 1887 年 (19 歳) から 1947 年 (79 歳) の間に各国の研究者から受け取ったものである。送り手の中には、Th. モムゼンや M.I. ロストフツェフなどの古代史家だけではなく、中世史家の H. ピレンヌ¹¹⁾ や中央アジア探検で有名な A. スタインの名も見つけることができる。この書物では、これらの書簡が送り手の名のアルファベット順に、送り手の短い伝記的情報とともに整理されている。ただし、書簡は、その全文全てが掲載されているわけではなく、あくまでも Bonnet の判断で「重要で、興味深いと思われる」書簡 350 通のみが全文掲載されており、残りはその内容が要約されて紹介されるという形をとっている。本書には、3つの付録も付いており、そこではキュモンが家族から受け取った私的な手紙 49 通、キュモンがガン大学を辞職することになった「ガン事件」に関する書簡、そしてキュモン自身の手になる書簡 40 通がまとめられている。Bonnet によれば、キュモンの親族の家があるベルギーの Wanlin には、さらに 10000 通近く上るほとんど未調査の書簡が保存されていたが、現在はアカデミア・ベルギカに移され、調査中であるという。

同じ年の9月には、アカデミア・ベルギカで、キュモン没後50年のシンポジウムも開かれた。その成果を収録した1999年に刊行された論集¹²⁾には、キュモンに捧げられた論文が5本載せられている。掲載順に紹介すると、J. Hamesse はキュモンとアカデミア・ベルギカ

の関係を論じ、A. Motte はキュモンのシンクレティズム概念の問題を指摘し、C. Bonnet はキュモンの書簡を再び取り上げている。Bonnet の論考は、キュモンの書簡の全体像を、先に刊行された著作で行われたよりも、より明快簡潔に紹介したものである。残る二本の、B. Rochette と G. Van Hooydonk-G. M. Proost による論文は、キュモンの著作の今日的価値について考察を加えたものである。

1997 年は、Bonnet が言うように、まさに「キュモン年」と呼ぶにふさわしく¹³⁾、10 月にはパリで A. Rousselle の主宰で「フランツ・キュモンとその時代の学問」をテーマとしたシンポジウムも開催された¹⁴⁾。寄稿者は掲載順に A. Motte, E. Gran-Aymerich, A. Spiquel, C. Bonnet, A. Rousselle, N. Spineto, P. Cabanel, F. Laplanche, J.-M. Pailler, P. Leriche, J. Gaborit の 11 名に上る。後二者は共著であるので、報告題目の数は総計 10 本である。報告題目は、これも掲載順に『『永遠の光 *Lux perpetua*』を再読するーフランツ・キュモンと同時代の学者たち』, 「フランツ・キュモン (1868—1947) とフランス考古学」, 「19 世紀におけるイシス」, 「一般宗教史から個別諸宗教の歴史へーフランツ・キュモンと宗教史学者との関係」, 「キュモン, ロワジイ, そして『宗教史・宗教文学研究』」, 「19 世紀末と 20 世紀初頭の間のイタリアにおける宗教史」, 「ヨーロッパにおける宗教学とフランツ・キュモンの学問形成」, 「20 世紀初頭フランスにおける宗教史」, 「フランツ・キュモンによるオリエント系宗教ー創造の継続」, 「フランツ・キュモン, フィールドの人」となっており、論文の題目からだけでも窺い知ることができるように、キュモンの著作を読み直すものから当時の学界の状況を分析したものまで、キュモンの生涯と学問業績の様々な側面に光が当てられたのである。

時間は前後するが、同年 5 月に開かれたベルギー・ルクセンブルク宗教史学会の年次総会において、R. Turcan がキュモンのミトラス教研究についての報告を行ったことも見逃してはならないであろう¹⁵⁾。さらに付け加えて置かなれば、この年には、キュモンの『ギリシア人とローマ人の占星術と宗教』のイタリア語訳が、イラン学者 A. Panaino の編集、序文付で出版されている¹⁶⁾。

(3) 「キュモン年」以後

「キュモン年」が終わっても、キュモン研究が終わることはなかった。1998 年には、アカデミア・ベルギカ所蔵の書簡を利用して、またも C. Bonnet がキュモンとオリエント学者 R. Dussaud の関係を論じた論文を公表し¹⁷⁾、1999 年には、G. Casadio によるキュモンの短いながらも要を得た評伝が著されている¹⁸⁾。そして、2000 年、キュモンの『ギリシア人とローマ人の占星術と宗教』のフランス語版が刊行された¹⁹⁾。もともと『ギリシア人とローマ人の占星術と宗教』は、キュモンが 1911 年にアメリカで行った公演の内容を翌 1912 年に英語で刊行したものであるが²⁰⁾、そのフランス語原本がアカデミア・ベルギカのキュモンの遺品の中から発見され、出版されたのである。英語版と異なり、このフランス語版には、「占

星術の世界観 La conception astrologique du monde」と「結論 Conclusions」の章がある。この他にも、2000年には、H. Lavagne がキュモンとサルモン・レナクの関係在未公開の書簡をもとに研究している²¹⁾。

2002年には、再びアカデミア・ベルギカでキュモンに関係するシンポジウムが開かれた。今回のシンポジウムは、「1900年頃のオスマン帝国における考古学：政治と経済と学問の間で」をテーマとしたもので、キュモンそのものを直接のテーマとしているわけではないが、シンポジウムがアカデミア・ベルギカで開催されたことから分かるように、このテーマはキュモンとも深くかかわるテーマなのである。キュモンは、一見、書斎の人にみえるが、実際には、オリエント考古学のフィールドに何度も足を運んだ人でもあったからである。キュモンは、1900年には、弟の Eugène とともにトルコ東北部のポントス地方と小アルメニア地方に考古学調査旅行に出かけ、1907年には今度はシリアへ同じく考古学調査旅行に赴いており、1922年と1923年にはシリアのドゥラ・エウロポスの発掘に携わったのであり、たびたびオリエントの地を踏んでいるのである。このシンポジウムの報告書には、17本の報告が載せられており、そのうちキュモンに関係する論文は4本である²²⁾。すなわち、キュモンの生涯と著作において旅行が持った意味について研究した C. Bonnet の論文、1900年のトルコ東北部の考古学調査の経過に考察を加えた V. Krings の論文、そして、残る2本の論文、それぞれ E. Gubel と M.-C. Bruwier によるそれらは、キュモンが関わったブリッセルの美術館、すなわちサンカンテール王立歴史美術博物館とマリモン王立美術館を通してのキュモンと中東世界の関わりについて分析を加えている。これら4本の論文は、いずれも、アカデミア・ベルギカ所蔵のキュモンの書簡や文書を利用しており、1997年以後のキュモン研究の深化を感じさせる。

1997年以後、キュモン研究の牽引車の役割を果たしてきた C. Bonnet は²³⁾、2005年、キュモン研究のさらに大きな一歩を踏み出した。それは、『「学問の偉大な工房」、フランツ・キュモンと「古代学 Altertumswissenschaft」、遺産と解放、大学での研究時代から第一次世界大戦の終結まで (1888～1923年)』と題された書物の刊行である²⁴⁾。キュモンは、1888年から1890にかけて、ボン、ベルリン、ウィーンへ留学し、Th. モムゼンや H. ディールス、H. ウーゼナーといった「古代学」の大家の講義に列し、その研究法を積極的に吸収、我がものとし、ベルギー帰国後もドイツの学界と交流を持ち続けたのであるが、本書は、このようなキュモンとドイツ古代史学界との関係を、これまで幾度も言及してきたアカデミア・ベルギカ所蔵のキュモンが受け取った書簡と新たに Bonnet がドイツで調査した300通を超えるキュモン自身が送った書簡を利用して、辿ったものである。広く当時の学問文化史となるべく意識的に執筆された419頁にも及ぶ大著であるが、これはあくまでも第1部であり、キュモンの残りの生涯を扱った第2部の刊行が予定されている。その上、この2部は完成したとしても、Bonnet の位置づけでは、あくまでも「フランツ・キュモンの伝記の資料 Matériaux pour une biographie intellectuelle de Franz Cumont」に過ぎないとされており、驚

くほか無い。

キュモンの書簡の研究は、2007年にさらに進む。この年には、キュモンとM.I. ロストフツェフの書簡がG. Bongard-Levine, C. Bonnet, Y. Litvinenko, A. Marconeらの手によって年代順に往復書簡の形に復元され、出版されたのである²⁵⁾。本書で紹介されている書簡は総計164通で、キュモンのそれが67通、ロストフツェフのそれが97通となっている。キュモンの書簡はいうまでもなくアカデミア・ベルギカに保存されているものであり、ロストフツェフのものはそのほとんどがアメリカのデューク大学にある。残存する書簡から判断する限りでは、両者の文通は、1897年10月にロストフツェフがキュモンに書簡を送ったことに始まり、1941年のこれもロストフツェフの書簡を最後に終わっている。20世紀を代表する両古代史家の交流が最も密になり、また読者にとってハイライトとなるのは、ドゥラ・エウロポスの発掘の時期にあたる1928～1930年(57通)と1937～1939年(37通)の時期の書簡である。この二つの時期に、計94通の書簡が両者の間でやりとりされた。ドゥラ・エウロポスの組織的発掘は、先に言及したように、1922年と1923年にキュモンが初めて行い、その後を引き継ぐ形で、1928年からロストフツェフを中心とするイエール大学が行ったのであり、そのため両者の間で、意見交換がたびたび行われたのであった。なお本書には、付録として「ドゥラ関連書類」としてD. Schlumbergerがキュモンに送った手紙などが収録されている。

1997年にキュモンが受け取った書簡の刊行から始まったキュモン研究が、キュモン自身の送った各国に散らばる書簡が調査されることで、往復書簡の形で研究が進むことは当然のことであったとはいえ、その労力には敬服せざるを得ないであろう。

さて、このように新しいキュモン研究は、主として書簡の刊行とそれに刺激を受けて動いてきたわけであるが、一方でキュモンの著作そのものの研究条件も整いつつある。『キュモン著作集 *Bibliotheca cumontiana*』の刊行がそれである。2006年の著作集第1巻『異教時代のローマにおけるオリент系宗教 *Les religions orientales dans le paganisme romain*,』²⁶⁾の出版を皮切りに始まったこの企画は、今のところ第2巻の『永遠の光 *Lux perpetua*』²⁷⁾が刊行されたに過ぎないが、キュモンの主要著作 (scripta maiora) 11巻²⁸⁾と論文集 (scripta minora) 7巻²⁹⁾、そして未公刊作品 (scripta inedita) 1巻³⁰⁾の計19巻の出版を予定している。現在刊行されている各巻には、非常に重厚な「解題 (Introdaction historiographique)」が付いており、キュモンの著作を読解する際に極めて有益である。例えば、今、手元にある『永遠の光』を例にとるならば、解題は147頁の分量を占め、その内容は執筆の経緯から著作の内容、利用された史資料、後世の評価にまで及んでいるのである。ただし、本文については、明白な誤植の修正などに留められており、オリジナルの原稿と対照した校訂とまではなっていない。

2. フランツ・キュモン年譜

以下の年譜は、C. Bonnet, *La correspondance scientifique de Franz Cumont conservée à l'Academia Belgica de Rome*, Bruxelles, Rome, 1997, pp.1-67 をもとに作成した。なお、キュモンの業績は、主要著作のみを挙げている。

1868 年 1 月 3 日 ベルギーの Alost で誕生。父親は Charles Florent Cumont (1830 ~ 1912 年)、母親は Marie Faider (1837 ~ 1890 年)。父方の祖父 Charles Cumont が 1815 年ごろフランスのピカルディー地方からベルギーに移住。貴族の家系である。母親の家は、ルクセンブルク大公の一族。当時、キュモン家は Alost で製糸工場を営んでおり、裕福なブルジョワジーであった。

1878 年 (10 歳) ブリュッセルのアテネ・ロワイヤルで中等教育を受け始める。

1884 年 (16 歳) ガン大学に入学し、Ch. Michel のもとで古典文献学を学ぶ。

1886 年 (18 歳) 冬学期にボン大学で H. Usener の神話学の講義に出席。

1887 年 (19 歳) 文学博士 (Docteur en philosophie et lettres) の学位取得。博士論文のタイトルは、*Alexandre d'Abonotichos. Un épisode de l'histoire du paganisme au II^e siècle de notre ère.*

1888 年 (20 歳) 懸賞論文 *Sur la propagation des mystères de Mithra* で政府奨学金を獲得し、ドイツ (ボンとベルリン)、オーストリア (ウィーン) へ留学 (1889 年まで)。ベルリンでは Th. Mommsen, H. Diels らの教育を受ける。

1890 年 (22 歳) アテネ滞在。母 Marie Faider 没。

1891 年 (23 歳) ローマを経て、パリに赴き、翌年まで L'Ecole Pratique des Hautes-Etudes で B. Haussoullier からギリシア碑文学を学ぶなどする。*Philonis de aeternitate mundi*, Berlin 出版。

1892 年 (24 歳) 1 月にガン大学講師 (chargé de cours) に就任し、8 月には特任教授 (professeur extraordinaire) に昇格。

1896 年 (28 歳) *Textes et monuments figurés relatifs aux mystères de Mithra*, II, Bruxelles 刊行。ガン大学正教授 (professeur ordinaire) となる。

1898 年 (30 歳) *Catalogus codicum astrologorum graecorum*, Bruxelles 刊行開始。

1899 年 (31 歳) Musées royaux d'Art et d'Histoire du Cinquantenaire の学芸員 (conservateur) に就任。*Textes et monuments figurés relatifs aux mystères de Mithra*, I, Bruxelles 刊行。

1900 年 (32 歳) 4 月 4 日から弟 Eugène と共にポントス、小アルメニアへ考古学調査旅行 (6 月 21 日まで)。*Les mystères de Mithra*, Bruxelles 刊行。

1901 年 (33 歳) Musées royaux d'Art et d'Histoire du Cinquantenaire の主任学芸員 (conservateur délégué) に就任。

- 1902 年 (34 歳) オックスフォード大学で講演 (Hibbert Lectures)。
- 1905 年 (37 歳) コレージュ・ド・フランスでオリエント系宗教について講義。
- 1906 年 (38 歳) オックスフォード大学で 2 度目の講演 (Hibbert Lectures)。 *Voyage d'exploration archéologique dans le Pont et la Petite Arménie* (*Studia Pontica* II), (avec E. Cumont), Bruxelles 刊行。 *Les religions orientales dans le paganisme romain*, Paris 刊行。
- 1907 年 (39 歳) 5 月 10 日からシリアへ考古学調査旅行 (6 月 1 日まで)。
- 1908 年 (40 歳) *Recherches sur le manichéisme* I, Bruxelles 刊行。
- 1910 年 (42 歳) *Recueil des inscriptions grecques et latines du Pont et de l'Arménie* (*Studia Pontica* III) (avec J. G. C. Anderson et H. Grégoire), Bruxelles 刊行。
- 1911 年 (43 歳) 文部大臣 Baron Descamps の大学教育への介入に抗議し、ガン大学辞職。名誉教授に。辞職後、スウェーデン (ウプサラ)、アメリカ (バルティモア、ペンシルヴァニア、シカゴなど) へ講演旅行。
- 1912 年 (44 歳) *Astrology and Religions among the Greeks and Romans*, New York 刊行。 *Recherches sur le manichéisme* II, Bruxelles 刊行。父 Charles Florent Cumont 没。
- 1913 年 (45 歳) Musées royaux d'Art et d'Histoire du Cinquantaire の主任学芸員の職を辞する。
- 1914 年 (46 歳) ベルギーを離れ、ローマに居を移す。第一世界大戦勃発 (7 月)。 *Comment la Belgique fut romanisée. Essai historique*, Bruxelles 刊行。
- 1917 年 (49 歳) *Études syriennes*, Paris 刊行。
- 1920 年 (52 歳) ローマに住居を購入 (Corso d'Italia)。
- 1921 年 (53 歳) アメリカに講演のため赴く。その時、オリエント学者 J. H. Brested からドゥラ・エウロボスの資料を示される。
- 1922 年 (54 歳) *After Life in Roman Paganism*, New Haven と *Iuliani imperatoris epistolae et leges* (avec J. Bidez), Paris 刊行。10 月から 11 月にかけてドゥラ・エウロボスの第 1 次発掘。遅くともこの年以後 Kléber 大通り 13 番地のアパルトマンがパリでの居住先となる。
- 1923 年 (55 歳) 10 月から 11 月にかけてドゥラ・エウロボス第 2 次発掘。
- 1925 年 (57 歳) ベルギー政府派遣の代表としてリビアで開催された考古学会に参加。サブラタやレプティス・マグナを訪問。シリアのアパメア発掘計画を企画し尽力 (その結果、1930 年から F. Mayence の手によって発掘開始)。
- 1926 年 (58 歳) ドゥラ・エウロボスの発掘報告書 *Fouilles de Doura-Europos (1922-1923)*, Paris 刊行。
- 1928 年 (60 歳) フランス隊によって発掘されたスサ出土のギリシア語碑文の刊行に携わる (～1939 年)。
- 1929 年 (61 歳) *Les religions orientales dans le paganisme romain*, Paris (第 4 版) 刊行。
- 1934 年 (66 歳) ドゥラ・エウロボスからミトラ神殿発見され、調査のためドゥラ・エウロ

ポスへ赴く。

1935 年 (67 歳) VIe Congrès international d'histoire des religions (ブリュッセル) 主催。

1936 年 (68 歳) Francqui 賞受賞。その賞金で基金を設立。後にアカデミア・ベルギカのフランツ・キュモン賞となる。

1937 年 (69 歳) *L'Egypte des astrologues*, Bruxelles 刊行。

1938 年 (70 歳) *Les mages hellénisés, Zoroastre, Ostanès et Hystaspe d'après la tradition greque* (avec J.Bidez), 2vols, Paris 刊行。

1939 年 (71 歳) アカデミア・ベルギカの初代総裁に就任 (5 月)。第二次世界大戦勃発 (9 月)。大戦中は、主にフランスで過ごす。疎開先は Clermont-Ferrand。

1942 年 (74 歳) *Recherches sur le symbolisme funéraire des Romains*, Paris 刊行。*Les mages hellénisés* で J.Bidez とともに Goblet d'Alviella 賞受賞。

1945 年 (77 歳) L'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres の依頼でローマとオスティアの遺跡を調査。

1946 年 (78 歳) 蔵書をアカデミア・ベルギカに寄贈。

1947 年 (79 歳) 2 月, パリの街頭で倒れる。5 月, アカデミア・ベルギカにキュモン文庫開設 (出席できず)。8 月 5 日, パリからベルギーの Woluwé-Saint-Pierre に車で移り, 同月 20 日, 義理の妹 Laure Du Monceau 宅で死去。Saint-Paul 教会の Ixelles の墓地に埋葬。

1949 年 *Lux perpetua*, Paris 刊行。

おわりに

先に述べた研究動向から明らかなように、キュモンの書簡が次々と刊行され (ちなみにアカデミア・ベルギカに所蔵されている書簡は HP³¹⁾ を通して依頼すれば、閲覧可能である), かつ解題付きの著作集の計画すら進行中となっている現在, キュモンの評伝を書く状況は着実に整いつつあると言ってよいであろう。単純に考えれば、本稿で作成した年譜を骨に、これをキュモンの著作と書簡を読み込むことで肉付けしていけば、キュモンの評伝を著すことができるわけであるが、果たしてうまく進むかどうか。机上のプランで終わらぬよう、努めたい。

註

- 1) フランツ・キュモン『ミトラの密儀』小川英雄訳, 平凡社, 1993 年。
- 2) フランツ・キュモン『古代ローマの来世観』小川英雄訳, 平凡社, 1996 年。また, キュモンの著作である *Recherches sur le symbolisme funéraire des Romains* の序論と第 1 章 1 の部分の邦訳が永澤峻氏によってなされている (『ローマ人の葬礼のシンボリズムに関する調査研究』, 和光大学総合文化研究所, 永澤峻編『死と来世の神話学』言叢社, 2007 年, 143 ~ 251 頁)。
- 3) 1936 年までのキュモンの業績のリストは, *Annuaire de l'Institut de philologie et d'histoire orientales et slaves*, 4, 1936, pp.VII-XXXI に挙げられている。ちなみに, それは 546 点に上る。

- 4) 拙稿「フランツ・キュモンの伝記的研究」『人文知の新たな総合に向けて：21世紀 COE プログラム「グローバル化時代の多元的人文学の拠点形成」』第4回報告書上巻，2006年，102～106頁。
- 5) F. De Ruyt, Franz Cumont (1868-1947), *L'Antiquité classique*, 16, 1947, pp.5-11; W. Lameere, Sur la tombe de Franz Cumont (1868-1947), *Alumni*, 17, 1948, pp.99-158; C. Préaux, Franz Cumont, *Chronique d'Égypte*, 45-46, 1948, pp.242-247; R. Dussaud, Franz Cumont, *Syria*, 26, 1949, pp.168-172; L. Canet, Franz Cumont, 1868-1947, in F. Cumont, *Lux perpetua*, Paris, 1949, pp.VII-XXX.
- 6) F. De Ruyt, Franz Cumont, *Biographie nationale*, 39, supp.11, 1978, pp.211-222; J. Duchesne-Guillemin, Cumont, Franz, *The Encyclopedia of Religion*, ed. by M. Eliade, 1987, 4, pp.178-179.
- 7) F. Vercauteren, Une correspondance scientifique: Théodor Mommsen-Franz Cumont (1894-1901), *Bulletin de l'Académie royale de Belgique, Classe des Lettres* XL, 1954, pp.68-90.
- 8) A. Momigliano, From Bachofen to Cumont, *Nono contributo alla storia degli studi classici e del mondo antico*, Roma, 1992, pp.593-607.
- 9) 小川英雄「フランツ・キュモンのローマ帝国宗教論」『松山大学論集』第6巻4号，1994年，27～41頁；前田耕作「キュモン・メモラビリア」『ディアナの森』せりか書房，1998年，211～232頁。
- 10) キュモンは，遺言で死後20年以内の書簡の公表を禁じていた。C. Bonnet, *La correspondance scientifique de Franz Cumont conservée à l'Academia Belgica de Rome*, Bruxelles-Rome, 1997, p. I. 書簡の他にも蔵書や中東旅行の際の手帳，写真などもアカデミア・ベルギカに遺贈されている。
- 11) 1862年生まれのパレンヌは，ガン大学でキュモンの同僚，友人であり，「ガン事件」に際してもキュモンのために奔走した。佐々木克己『歴史家アンリ・パレンヌの生涯』創文社，1981年，145～146頁。
- 12) C. Bonnet et A. Motte (éd), *Les syncrétismes religieux dans le monde méditerranéen antique, Actes du colloque international en l'honneur de Franz Cumont à l'occasion du cinquantième anniversaire de sa mort, Rome, Academia Belgica, 25-27 septembre 1997*, Bruxelles, Rome, 1999.
- 13) C. Bonnet, La formation de Franz Cumont d'après sa correspondance (1885-1892), *Kernos*, 11, 1998, pp.245-264. なお Bonnet は，この論文で，1885年から1892年までのキュモンの書簡251通（アカデミア・ベルギカ及び Wanlin の所蔵）をもとに，若き日のキュモンの学問的形成過程を論じている。
- 14) その成果は，*Mélanges de l'école française de Rome, Italie et Méditerranée*, Tome 111, Paris, 1999 として刊行。
- 15) 報告内容は，翌年の『ケルノス』に掲載された。R. Turcan, Franz Cumont, un fondateur, *Kernos*, 11, 1998, pp.235-244.
- 16) A. Panaino (ed.), Franz Cumont, *Astrologia e religione presso I Greci e Romani* (trad. P. Dalla Vigna), Milano, 1997.
- 17) C. Bonnet, Lettres de René Dussaud à Franz Cumont conservées à l'Académie Belgica de Rome, *Festschrift Oswald Loretz*, Münster, 1998, pp.109-125.
- 18) G. Casadio, Franz Cumont, Historien des religions et citoyen du monde, *Imago antiquitas*, Paris, 1999, pp.161-165.
- 19) Franz Cumont, *Astrologie et religion chez les Grecs et les Romains*, Texte présenté et édité par Isabelle Tassignon, Bruxelles, Rome, 2000.
- 20) F. Cumont, *Astrology and Religion among the Greeks and Romans*, New York, 1912.
- 21) H. Lavagne, Lettre inédites de Franz Cumont à Salomon Reinach, *Comptes rendus de l'Académie des Inscriptions et Belles-Lettres*, 2000, pp.763-744.
- 22) V. Krings et I. Tassignon (éd), *Archéologie dans l'Empire ottoman autour de 1900: entre politique, économique et science*, Beuxelles, Rome, 2004.
- 23) Bonnet は，2007 年以後，毎年のようにキュモンに関する研究を発表している。本文中で言及したもの以外にも，Frnz Cumont et les risques du métier d'historien des religions, *Hieros*, 5, 2000, pp.12-19; Franz Cumont recenseur, V. Pirenne-Delforge et E. Delruelle (éd.), *Képoi, Mélanges A. Motte*, Liège,

2001, pp.309-355 などがある。

- 24) C. Bonnet, *Le «grand atlier de la science», Franz Cumont et l'Altertumswissenschaft, Héritages et emancipations, I-Des études universitaires à la fin de la première guerre mondiale (1888-1923)*, Bruxelles, Rome, 2005.
- 25) G. Bongard-Levine, C. Bonnet, Y. Litvinenko, A. Marcone, *Mongolus Syro Salutem Optimam Dat, La correspondance entre Mikhaïl Rostovtzeff et Franz Cumont*, Paris, 2007. なお、予備的調査は、既に2000年から始まっていた。G. Bongard-Levine, C. Bonnet, Y. Litvinenko, A. Marcone, *Aperçu préliminaire de la correspondance entre Franz Cumont et Mikhaïl Rostovtzeff, Bulletin de l'Institut historique belge de Rome*, LXX, 2000, pp.349-412; G. Bongard-Levine, C. Bonnet, Y. Litvinenko, A. Marcone, *«Mongolus Syrio salutem optimam dat»: the correspondence between M. I. Rostovtzeff and F. Cumon*, G. Bongard-Levin and Yu. Litvinenko (ed.), *Parthian Shot*, Moscow, 2003, pp.220-259 (本文はロシア語)。
- 26) *Les religions orientales dans le paganisme romain*, Paris, 1929 (4éd.), C. Bonnet et Fr. Van Haepere (éd.), Torino, 2006.
- 27) *Lux perpetua*, Paris, 1949, B. Rochette et A. Motte (éd.) avec la collaboration de B. Toune, Torino, 2009.
- 28) 刊行予定順に以下、残り9巻のタイトルだけ挙げておく。1, *Les Mystères de Mithra*. 2, *Recherches sur le symbolisme funéraire des Romains*. 3, *Comment la Belgique fut romanisée. Essai historique*. 4, *Studia Pontica*, 1-3. 5, *Les mages hellénisés, Zoroastre, Ostanès et Hystaspe d'après la tradition grecque* (avec J. Bidez). 6, *L'Égypte des astrologues*. 7, *After Life in Roman Paganism*. 8, *Études syriennes*. 9, *Fouilles de Doura-Europos, 1922-1923*.
- 29) 論文集は、次のようなテーマで分類される。1, Philosophie. 2, Religions orientales et cult à mystères. 3, Religions orientales et la transformation du paganisme. 4, Astrologie et Magie. 5, Christianisme et Judaïsme. 6, Manichéisme. 7, Doura-Europos.
- 30) 内容は、Correspondance Franz Cumont. つまり書簡集である。
- 31) www.academiabelgica.it.